

18-15 授業解題

島名：グローバル・イシュー

教科（領域）：国語と英語の教科横断授業

単元（教材）：「和歌を訳そう」

対象：附属高等学校 1年3組

授業者：佐古孝義先生（英語）・境倫代先生（英語）・川井亮先生（国語），（オブザーバー：岡本幹先生（理科））

1. グローバル・スタディーズの観点からみた本授業の「強み」

「グローバル・イシュー」の授業として開発された本授業は、異なる文化背景の人々との相互理解の構築に焦点が当てられた、グローバル・イシューの典型的な授業の一つと言えるだろう。

授業では、和歌の英語詩への翻訳、逆に英語詩を再び和歌へと翻訳することによって、日英の表現の仕方、物事の捉え方の差異について理解を深めた。

「翻訳」は外国語教育では「文法訳読」という古くさいパラダイムに属する活動かもしれないが、オリジナルの和歌を解釈したうえで、それを脱構築し、英語で再構成しようとしたときに、日本（人）のものの捉え方の相対化や、表現内容をよりグローバルな視点で捉え直しながら表現することにつながった点は高く評価できる。

英語や古典語の学習は、ともすると受験のための学習に陥りやすい。また異文化の理解も、「遠い国の自分とは異なる奇異な文化を鑑賞する」ことに終始する危険をつねにはらんでいる。しかし今回は一連のプロセスが「真正な学習」として機能していたと考える。

非常に興味深いことに、一連の授業の中で異文化の接面は「日本語文化 vs 英語文化」だけでなく、「日本の古典文化 vs 現代文化」「生徒個々の関心のありようや古典語、英語の知識の差異」等、複数の局面として顕現していた。「異文化の接面」において如何に「差」に橋を渡し、コミュニケーションを成立させるかは、まさにグローバル・イシューのモチーフの一つである「異なる背景の人との共通理解の構築」に他ならない。

2. グローバル・スタディーズのカリキュラム開発にむけて

本授業では、英訳の意図・手法がその作品の英訳をするにあたって妥当であったか、何が問題点であったかなどを議論しているが、教員からの「添削」にならないようにしながら、生徒同士の討論により問題点を浮かび上がらせたり、学びへと方向付けたりすることは、教員間の緊密な協働と個々の担当教員の高い力量とを必要とするものである。このような授業を成立させるためには、まずはそのための環境整備が求められるだろう。